

聴覚障害学生及び支援学生の支援に対する考え方

○岡田雄佑 佐藤正幸 白澤麻弓
 (筑波技術大学大学院技術科学研究科) (筑波技術大学高等教育研究支援センター)
 KEY WORDS: 聴覚障害学生 支援学生 支援に対する考え方

(目的)

近年、聴覚障害学生支援を聴覚障害学生と学生ボランティア(以下、支援学生)という学生間で行う例が多く見られる。このような学生同士による支援は、他者の状況や心情を理解することとなり、社会性が育まれるといった利点も指摘されている(金澤・大杉, 2010)。そのため、大学によっては積極的に取り入れるところも多く見られる。しかしながら、学生同士であるが故に生じる課題も考えられる。例えば、聴覚障害学生が「助けてもらっている」という思いから、支援学生に対して要望があっても伝えにくくなるといった問題や、支援学生の場合、十分に情報を伝えきれないことに対する不安など、心理的な負担が生じるということも指摘されている(白澤, 2008)。そういった中で、支援に関わる学生それぞれが、支援にどのような考え方を持っているのかを詳細に明らかにした研究は少ない。そこで本研究では、聴覚障害学生及び支援学生それぞれが、支援に対してどのような考え方を持っているのか、また、両者の考え方の違いは、どのような部分に見られるのかを明らかにすることを目的とする。

(方法)

今回の目的を明らかにするために、以下の方法で質問紙調査を行った。

(1) 調査対象・調査期間

大学等高等教育機関に在籍し、現在、聴覚障害学生支援に関わっている聴覚障害学生及び支援学生を対象に調査を実施した。調査期間：2017年4月

(2) 調査内容

5件法による無記名式の質問紙調査を実施した。先行研究を参考に、質問内容について4つの大きなカテゴリー(①支援に対する姿勢について②支援の技術について③支援の位置づけについて④聴覚障害学生と支援学生の関わりについて)を作成し、それらを基に、聴覚障害学生、支援学生を対象とする、質問項目55問を作成した。

(3) 分析方法

調査結果については、統計解析ソフトウェア「IBM SPSS Statistics 23」を用いて、支援学生、聴覚障害学生の回答について、それぞれ相関を調べた。

(結果・考察)

今回の調査では、聴覚障害学生11名(平均年齢20.5歳 男性：2名 女性：9名)、現在聴覚障害学生支援に携わっている支援学生17名(平均年齢20.3歳 男性：6名 女性：11名)から回答を得た。

ここでは、「支援に関して、聴覚障害学生と支援学生間で考え方に違いがあると感じている」を総括的な質問項目として、これについて大きく関連が見られた質問項目について、抽出した。また、結果については違いがあると感じている学生の視点ではなく、合致していると考えている学生の視点から述べていく。

(1) 聴覚障害学生

55問中4つの質問項目について、相関が見られた。「聴覚障害学生支援に関わることは支援学生のためになる」という質問項目(カテゴリー：③)に対して負の相関($r=-.608$

$p<0.5$)、「支援学生と聴覚障害学生は日常生活(支援活動以外の場)でも積極的に関わりを持つべきである」という質問項目(カテゴリー：④)に対して強い負の相関($r=-.707$ $p<0.5$)、「支援学生と支援活動場面で積極的に関わる事ができている」という質問項目(カテゴリー：④)に対して強い負の相関($r=-.790$ $p<0.1$)、「プロの支援が受けたいと思う」という質問項目(カテゴリー：③)に対して正の相関($r=.625$ $p<0.5$)が見られた。これらの結果から、現在、支援学生と支援に対する考え方が合致していると感じている聴覚障害学生ほど、聴覚障害学生支援に関わることは支援学生のためになると考える傾向にあると考えられる。また、現在、支援学生と支援に対する考え方が合致していると感じている聴覚障害学生ほど、支援活動場面はもちろん、支援学生との日常的に関わるということについても重要なものとして捉え、日常的に密な関わりを持っていたいと考えていることが推察される。そして、現在、支援学生と支援に対する考え方が合致していると感じている聴覚障害学生ほど、プロの支援を受けるということを望んでおらず、学生同士で行う支援について、何らかの利点を感じていることが推察される。

(2) 支援学生

55問中2つの質問項目について、相関が見られた。「聴覚障害学生支援は学生が行うべきではない」という質問項目(カテゴリー：③)に対して正の相関($r=.489$ $p<0.5$)、「聴覚障害学生は現在の支援に満足していると思う」という質問項目(カテゴリー：□)に対して負の相関($r=-.522$ $p<0.5$)が見られた。これらの結果から、現在、支援に関して、聴覚障害学生と考え方が合致していると考えている支援学生ほど、学生同士での支援を行うことに対して、肯定的な考え方をしている傾向が見られる。また、聴覚障害学生の支援に対する満足度についても、聴覚障害学生と考え方が現在、合致していると考えている学生ほど、聴覚障害学生の満足度は高いと考える傾向にあると考えられる。

(3) まとめ

現在、支援に関して、聴覚障害学生、支援学生間での考え方が合致していると感じている学生(聴覚障害学生、支援学生)は支援を学生同士で行うことに肯定的であるということが考えられた。しかしその反面で、現在、聴覚障害学生、支援学生それぞれで考え方が合致していない、違いがあると感じている学生は、先行研究等で指摘が見られるように、学生同士の支援に対して、何らかの不満や課題を抱えていることが考えられる。

今回の結果は1校の大学に対しての調査データであった。そのため、今後複数の大学を対象に調査を実施することで、異なった特徴、結果になることも考えられる。今後は複数大学を対象に調査を実施し、大学間での結果の差異や傾向について検討していきたい。そして、今回の結果から、支援の考え方に関連が強くあると考えられた支援学生と聴覚障害学生の関わりについて、考え方を合致させながら、支援を行うには、どのような関係が理想的なのかなどについて検討していきたい。

(OKADA Yusuke, SATO Masayuki, SHIRASAWA Mayumi)